



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第六二号）

小暑

七月七日

立神の円空仏画



町には古くから伝わるお宝があります。しかし、中には守り続けられず、失ってしまったお宝が少なくないのも事実です。志摩市の立神では貴重なお宝が地元の人々の手によって守られていました。

立神に伝わるお宝は、江戸時代初めの仏師・円空が描いた仏画。延宝二年（1674）、立神の薬師堂に立ち寄った円空が、大般若経を巻本から折本に修理した三ヶ月の間に描いた百二十八枚もの仏画が残されているのです。六百巻にのぼる経本は古くは平安時代にさかのぼるものもあり、その管理にはさぞや苦心されていることと尋ねると、町では祭りに合わせて年五回ほど虫干しをかねて転読を行っているということでした。

大般若経の転読を行うのは薬師堂です。昭和三十年頃まではここで村芝居が行われていたといえます。町内の寺の住職と町長、役員が揃い、毎回百巻から百五十巻が虫干しされます。転読後、仏画を見せてもらうと、十六善神という般若経を守る十六の神の姿が柔らかい筆致で描かれています。ノミ跡を粗く残した円空仏とは違って、優しい印象を受けました。

気になったのは、各所に押されている木の葉の小舟に乗った童子の印。以前調査された方によると、日本神話に登場する少彦名神ではないかということです。身体の小さい少彦名神は海の向こうから舟に乗って登場し、大國主命と協力して国造りにあたったとされ、特に医薬を開発した神として信仰されてきました。この舟に乗った童子の印は、英虞湾に面した立神に当時根付いていた海の薬師信仰を物語っているのかもしれませんが。間もなく、今年で四回目の虫干しが行われます。

文 千種清美

